

影の告発

ポケット文春 108

1963 年 1 月 25 日 初版発行

定価 240 円

著 者 ^{つち}土 ^や屋 ^{たか}隆 ^お夫 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西 8ノ4

印刷 精 興 社

印刷 凸版印刷

製本 矢 嶋 製 本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

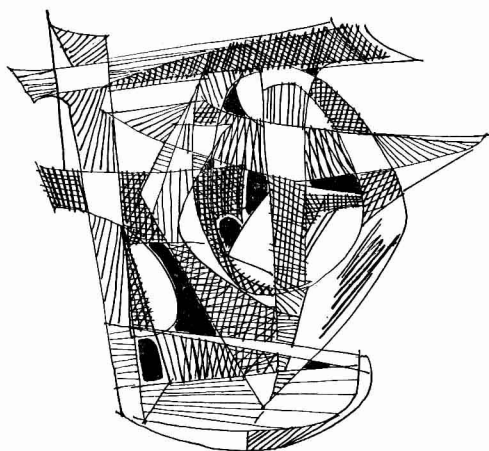
影 の 告 発

推理長篇

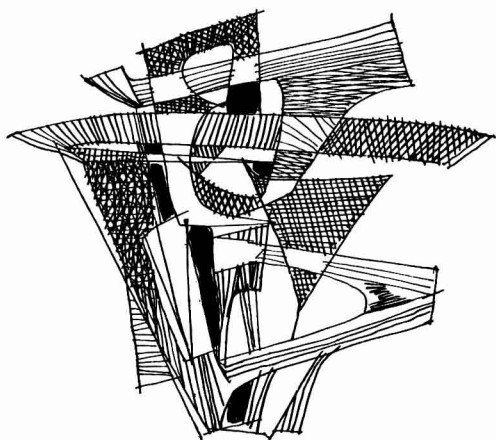
土
屋
隆
夫

文藝春秋新社

目 次



第一章	零の目撃	7
第二章	声の演出	23
第三章	点の追及	36
第四章	雨の暗転	54
第五章	罪の等式	69
第六章	肌の背信	87
第七章	屍の経歴	107



第十四章	第十三章	第十二章	第十一章	第十章	第九章	第八章
影の告発	雲の論告	時の障壁	鈴の哀愁	夢の証言	線の喪失	檻の慟哭
260	234	216	198	170	152	135

カ装
ツ
ト幀

土

井

榮

第一章 零の目撃

……少女はうっすらと目を開いた。眠りからさめたようでもあり、もっと深い眠りに入ろうとして、ふと、周囲をたしかめているようでもあった。

少女が目を開くと、いつでも、クリーム色の壁にかけられた丸い時計が見えた。それは少女が見るたびに、四時になったり、十一時になったりしていた。四時は、昨日の四時だろうか。或は一昨日の四時だったかもしれない。それは、どっちでもよいことだった。四時と十一時の間に、どれだけの時間が埋まっていたても、少女には、なんのかわりもなかった。

部屋の中は、暗くて陰気だった。丸い時計をのぞいては、一つの装飾もない。部屋というよりも、それはただの空間だった。

だから、脚の高い、そまつなベッドに、ひっそりと横たわっている少女は、ときどき、自分の体が、ふわりと浮び上がり、手ごたえのない軽さで、漂ったり、流されたりしているように感じた。

——わたしは、このまま死ぬのだろうか。

少女は、ぼんやりと、そんなことを考えていた。

——このつぎ目をさましたとき、わたしはもう、ここにはいない。わたしはもう、どこにもいないのだ。

少女は、いつ死んでもいいと思った。だから、両手を組んで、胸の上に置いていた。でも、死ぬ前に、一つだけ、知っておきたいことがあった。

——あれは、わたしだったろうか。

それはもう、いままでに幾度も考えたことだった。百回も、千回も。それを考えた回数だけ、少女

はこの世の中に生きてきたような気がした。

——あれは、わたしがやったのだろうか。

少女は、考える力を失っていた。でも、あきらめることはできなかった。死ぬ前に、どうしても確かめなければならぬ。見開いた瞳を、なにもない空間にすえて、少女は、おぼろげな記憶を呼びよせようとした。うすれて行く意識に、追いつがろうとした。

——あれは、わたしがやったのか……。

1

東都デパートの女店員たちは、毎年三月に入ると、

「また、鴉のやってくるシーズンになったわ」

「いやあねえ。一日に、何千羽も来るんだから……」

「お店だって、エサ代が大変じゃない？」

というような言葉を、更衣室や売場の片隅で囁きあった。自分たちの『主任さん』やお店の偉い人に聞か

れてはまずい話だった。そんなとき彼女たちは、仲間だけに通じる目つきでうなずきあい、小さな声を上げて笑った。

この近代建築をはこる東都デパートに、一日に何千羽も群がって来る鴉は、もちろん、本物の鳥ではない。それは、地方から修学旅行で上京して来る、中学生や高校生たちのことだった。

毎年、この季節になると、東都デパートの周囲には、大型の観光バスがぎぎぎと押しよせて来る。その整理や誘導のために、デパートでは、専任の係員が待機していた。

バスから降りてくるのは、ほとんどが中学生や高校生たちである。その服装は、この旅行のために新調したことが一目で判るような真新しい生地の手洗いとどめていた。男子は黒の学生服に黒い帽子、女子は紺のセーラー服に黒い靴下というのが大部分で、靴は中合わせたように、ズックの運動靴だった。

この黒い一団は、デパートの入口から少し離れた場

所で、二列か四列の縦隊を作る。先頭には、ウンザリした顔つきの教師たちが、疲れたように立っていた。「いいな、買物をするときは、さきに金をわたす。値段は正札どおりで、まけちゃくれないぞ。店内での単独行動はいけない。エレベーターやエスカレーターに乗るときは、じゅうぶん注意すること。一時間後に、店内放送で集合を知らせる。そしたら、また、この場所に集まること。ボヤボヤしていると置いて行くぞ。入口はいくつもある。一階の、どういう売場のある入口から入ったか、目印になるものを覚えておくんだ。判ったな、便所の使用は特に注意する。よし、それじゃ出発」

学校を出る前に、いくどもくりかえされた注意が、改めて申渡される。しかし、生徒たちは殆んど無関心だった。目の前に聳える壮麗な建物に心をうばわれ、入口にある巨大な裸婦の彫像をポカンとみつめているのだ。

そして、彼等の感激は、店内に一歩足を踏み入れた

とき、正に最高潮に達する。きらびやかな照明。絢爛たる色彩。流れる音楽。その中を歩きまわっている無数の人。彼等は一瞬、立ちどまってしまふ。息をのむ。それから、隣りにいる友人の手をしっかりと握りしめて、このお伽話の王国へ踏みこんで行く。

霧の深い山峡の村や、霧の濃い北国の海辺に育った彼等にとって、はじめて見るデパートの内部は、驚嘆すべき人工の美に溢れていた。彼等は、五、六人で一つの班を作り、店内を探検する。そして、この一団が、他の一団に出会ふと、いま自分たちの見て来たものを、その素朴な感激を、あらゆる方言をぶつけあつて語るのだった。

この黒い一団を、東都デパートの女店員たちは、鴉の来襲にたとえていた。鴉は、北からも南からも来た。北海道の果てから、九州の南端にある小島から、そして中部山岳地帯の、平家の落人が住んでいるという部落からも来た。彼等の大部分は、旅行のための貯金をしていた。兎を飼い、海藻を採り、伐木の手伝い

をする。それは、中学や高校に入った日から始められた。彼等は、わずかな金を積みたてながら、この旅行に対する夢を積みかさねて来た。だから、彼等の見学場所で、その探検ぶりが、少しばかり執拗であり、そうぞうしすぎるのも無理はなかった。

やがて、一時間の見学が終ると、店内放送が校名を呼び、生徒たちは所定の場所にゾロゾロ集ってくる。それから、店員たちが「エサ」と呼んでいる、東都デパートの店名入り鉛筆を一本ずつ貰うと、この宏壮な建物の内部に、ほし草や潮の匂いをまきちらしたまま去って行く。そして、いれ代りに入ってくる一団が、もう、黒々と入口に群がっているのだった。

東都デパートの女店員は、毎年、三月の末から四月いっぱい、この「鴉たち」に悩まされた。竹原佐知子もその一人だった。

「シンが疲れるのは私たちだけよ。お店は宣伝になるんだから、いいでしょうけれど……」

それは彼女の言う通りだった。この生徒たちは、買

物客ではなかった。はじめから「見学」を目的にしていた。店内では、正札の価格を見て、溜息をもらすだけである。しかし、彼等が現在の買物客ではないとしても、デパートには大切な顧客だった。一年後に、彼等の大半は上京してくる筈だった。工場や商店が、彼等待ちかまえている。この歴大な将来の購買層に、デパートが冷淡でいい理由はなかった。まして、地方販売部を持つ東都デパートは、よい印象を持って帰り願う必要があった。

「それにしてもよ、わたしなんか一番の被害者なんだから……」

佐知子はその言って、同僚にコボした。彼女の職場は、エレベーターの運転係だった。

地方から来た生徒たちが、エレベーターやエスカレーターに示す関心には、異常なものがあつた。大半の中学生たちには、生れて初めての経験なのである。彼等は、無料の施設は、すべて利用した。一階から八階まで、なんの苦もなく上下できるということは、まこ

とに快適なスポーツだった。

四角な鋼鉄の檻の中で、生徒たちは、野性の動物に似ていた。特にエレベーターが下降する時は、いちようにアツというような嘆声を洩らした。それから、変声期に特有なガラガラした声で、笑ったり、しゃべりあったりした。

ドアが開くと、彼等は待ちかねたようにとび出して行く。そして、別のエレベーターの前に走った。そんな時も佐知子は、「店員接客心得」に示されているように、適度の愛嬌と、誠実さの溢れる声で、

「一階お出口でございます。御来店、まことに有難うございました」

と軽く頭を下げなければならない。そして、すでに待ちかまえている一団に向って、

「いらっしゃいませ。八階までまいります」

と、うやうやしく迎え入れるのだった。この、無限につづく単調な時間と労力は、毎月の給料袋の中で、十枚余りの千円札に換算されていた。もちろんそれ

は、竹原佐知子の青春をゆたかにするほどの金額ではない。

2

その日、正確に言えば四月六日、金曜日の朝、佐知子は玄関で靴をはきながら、

「今日は大へんよ」

と呟くように言った。娘の出勤を見送ろうとして、うしろに立っていた母親が、

「大へんって、なにかあるの」

と訊ねたが、かがみこんだ娘は、

「うん、とにかく大へんなのよ」

と短く答え、

「行ってまいります」

と玄関の戸を開け放しにしたまま、表へとび出して行った。スラックスにつつんだ脚が、躍るように道を蹴って、長い髪が肩のあたりで揺れている。娘の姿

が、通りの角に消えるまで、母親はそこに立っていた。いつになっても、子供らしさの脱けきらない娘に、目を細めていた。

（あの子も、もう二十^{はたち}になるのかねえ）

玄関の戸を締めるとき、母親はちょっと空を見上げた。花どきを思わせるような、ドンヨリとした空模様だった。

その朝、東京地検の検事、千草泰輔の家でも、同じような会話が交わされていた。

検事は食事をすませた所だった。煙草に火をつけると、いつものように朝刊の社会面にザッと目を走らせた。検事は見出しだけを読む。役所に出勤し、自分の机の前に坐れば、ここにある記事よりも、もっと詳細な、具体的な報告が待っている筈だった。

食卓の後を片付けながら、検事の妻は、思出したように、

「今日は大へんですよ」

と夫の横顔へ話しかけた。

「なにかあるのか」

検事は、新聞に目をおとしたまま言った。

「だって、東都デパートへいらっしゃるんでしょ」

「うん」

と検事はナマ返事をした。

妻の言葉が、気のすまない用件を思出させたのである。東都デパートでは、いま、前衛書道展が開かれている。検事の先輩に当る、ある高官の長男が、そこに出品していた。検事は、書道に興味を持たない。まして、墨象芸術などと称する、字とも絵とも判然としない作品を見るのは苦手である。しかし、その先輩には義理があった。「愚にもつかん落書きだが、まあ一度見に行ってくれたまえ」と頼まれてみれば、無下に断ることもできなかった。会場には、観覧者芳名簿があるという。そこに自分の名前を記して、鑑賞した証拠を残しておかなければならない。展覧会は今日が最終日だったし、先輩には二、三日後に会う約束があ

る。昨晚、そのことが話題にのぼったとき、検事は「しかたがない、明日、なんとか都合して行くことにするよ」と言った。妻が言い出さなければ、忘れてしまったかもしれない。

「東都デパートになにかあるのか」

検事は新聞から目を上げて言った。

「その広告に出ています。今日は『夏のモード・ショー』という催し物があるんですよ」

「書道展には関係のないことだ」

「でも、そのショーに、ケリイ・白田が特別出演するんですって」

「ふん、あの歌うたいか」

検事は露骨に眉をひそめた。ケリイ・白田は、ハイティーン歌手として、近頃、爆発的な人気を呼んでいる。この正月、S劇場で新作発表会を開いた時は、劇場に押し寄せた観衆の中に、怪我人が出るほどの騒ぎだった。所轄署からは警官が出動してその整理に当たったくらいである。

「一曲終るごとに、花束や贈物を持った少女たちが、ワッツと喚声を上げて舞台に駆け上がった行く。握手する。抱きつく。中には噛みつく女の子がいるそうですよ。とにかく、目をギラギラさせ、髪をふりみだして、ケリイのまわりに押しかける。そいつを又、客席の女たちがキャーッとはやしたてる。あの声を聞いてみると、メスがオスに躍りかかって行くような、すさまじい迫力に溢れていて、こっちまで、気が変になりました」

整理に出動した警官の話聞いて、検事は無然としたことがある。世代の相違であろうか。

それにしても、細いズボンの足を、少しガニ股に開いて、手をふり、腰をくねくねと曲げて歌うこの少年歌手を、検事は嫌った。無理に押し殺した、そのカスれたような声は、淫猥な情感にあふれていた。検事の妻が、テレビの前で、その歌声に耳をかたむけているとき、検事は黙ってチャンネルを切りかえた。それは、検事の嫉妬だったかもしれない。

「とにかく、今日の東都デパートは大へんですよ。なんととっても、あの歌手には、熱狂的なファンがいるんですから……」

「あんなものは歌手じゃない」

検事は、断定するように言って立上った。

「書道展は三階ですよ」

「判っている」

検事は、不機嫌な声を出した。

玄関を出るとき、検事はちょっと空を見上げて、

「曇っているな」

と言った。べつに、その日の天候を気にしたからではない。それは「行ってくるよ」という挨拶のかわりだった。だから、いけ垣にはさまれた小路を歩き出したとき、検事はもう、いまの言葉を忘れていた。それを出したのは、ずっと後になってからである。

「いってらっしゃい」

検事の妻は、夫の背中に声をかけた。

（あの背広じゃ、もうおかしいかしら）

彼女は、夫の姿が見えなくなるまで、ぼんやりと見送っていた。子供のない家庭だった。

3

「夏のモード・ショーは、本日から三日間毎日午後一時、七階大ホールで開催いたします。なお、このショーには、ケリイ・白田の特別出演がございます。そのため、会場への御入場は、御招待券御持参の方に限ることになっております。御招待券は、お申込みの葉書を抽せんの上、それぞれおとだけ申上げました。なお、御招待の日づけに、お間違いないよう、もう一度、おてもとの御招待券をおたしかめ下さいませ……」

東都デパートでは、朝から、店内放送が同じ言葉を繰返していた。会場の混乱を防止するために、七階大ホールの入口には、幾人もの保安係が立っていた。

午後一時の開場だというのに、開店と同時に押しか

け、ホールへとび込んで来た少女たちの一団が、楽屋の一室に坐りこんでしまった。

会場は準備中だったし、その部屋はモデルたちの更衣室を兼ねている。制止する係員に対して、少女たちは招待券をつきつけ、口々に叫んだ。

「アタマに来ちゃうな、出て行けだなんて」

「ここで待たせてよ、ね、おじさん」

「あたしたちはね、ケリーの身内も同然なんだ」

「つまりさ、ケリーの親衛隊よ」

「一緒にいてやりたいんだ。あの子、すぐくウブなんだからさ」

「わッ、シビレル！」

「よして、抱きつかないでよ」

少女たちは、楽屋の中で傍若無人にふるまった。十五、六歳から、二十ぐらゐであらうか。もり上がった胸や、ゆたかな腰部のふくらみの中で、稚ない表情だけが戸惑っているようであった。

保安係は、この「お客さま」を、ひとまず退場させ

るのに、汗を流した。その為、彼女たちの口ぎたない罵倒を、一身に浴びた。噛み散らしたガムを片付けながら、保安係は苦笑し、腹をたてていた。

（このチンピラどもめ！）

竹原佐知子も、腹をたてていることでは同じだった。

なぜこんなに人が集まってくるのか。デパートは、なぜこんなに人を集めなければならないのか。ここにはもう、買物を楽しむ雰囲気はない。エレベーターに駆けこんで来る人々は、買物客というよりも、殺氣じみた掠奪者の目つきをしていた。

疲れが、いつもより烈しかった。それが余計、佐知子を怒りっぽくしていた。修学旅行の中学生たちも、野卑で騒々しかった。

（今日の鴉は、とくにガラが悪いわ）

佐知子が、そう考えたのも無理はない。中学生たちは、この混雑に、少し興奮していたのだ。現に、彼の一人は、重々しい、ナマリの多い言葉で、